

右手

浜 秀次

「子、裕子！」

「ん……？」

体をゆすられて、裕子はようやく机から顔を上げた。

「舞……？」

「舞？、じゃないよ。もう授業終わったよ。」

裕子が授業中に寝るなんて珍しいね」

親友の言葉に、裕子は教室を見回す。クラスメイトたちはおしゃべりをしたり、帰り支度をしたりしていた。

「寝ちやっただ……」

裕子は肩を落とした。授業中に寝たのは生まれて初めてのことだった。

「疲れてるの？」

「そうかも。最近、家で勉強してるときも、よく眠くなるし……」

「優等生だね、裕子は。眠いときは勉強なん



ノートの半分ほどを、『死』の文字が埋め尽くしていた。

(学校でもなんて……)

ここのところ彼女の身に起きている異変は眠くなることだけではなかった。目を覚ますと、必ずノートに『死ね』の文字が何行にも渡って書かれているのだ。

むろん、彼女に書いた覚えはない。意識のない間に右手が勝手に動いているとしか考えられなかった。だが、そんなことがありえるのだろうか。

(きつとただの偶然、よね)

自分のそう言い聞かせ、裕子は舞の元へ向かった。

勉強をしていた裕子は、急に眠くなった。いけないと思い、裕子は舞に電話をした。舞とのたわいもない話は、一時的とはいえ、裕子の頭の中から『死ね』が書かれたノートことを忘れさせてくれた。

『そうそう、『勝手に動く手』の噂、知ってる？』

彼女は唐突にそう切り出した。

「なに、それ？」

『自分の意識がないときに利き手が勝手に動いて、「死ね」って書くの。もし「死ね」って四四四回書かれたら、その人死んじゃうんだって』

裕子は言葉を失った。

『あつ、ごめん。親がなんか用があるみたい。また明日ね』

「あ、待つ……」

て、と言い終えるよりも早く、舞は電話を切ってしまった。彼女に聞きたいことは沢山あったが、それよりも気になることがあった。

「いまの話がもし本当だったら……」

裕子はノートを最初のページから見直した。

『死ね』の数を数える。

「三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、

四〇〇……ちょうど四〇〇個」



このままでは死んでしまう。裕子は一目散にキッチンに向かい、包丁を取り出す。

「うわああああ！」

裕子は無我夢中で右手に包丁を振り下ろした。

「ずいぶん、上手くなったね」

舞はそう言っつて、無骨な字が羅列されたノートをぺらぺらとめくった。

裕子は「もう一年だもの」と苦笑いで答え、左手に持っていたペンを置いた。彼女の右腕には手首から先がなかった。

と、ノートを見ていた舞は手を止めた。

「ねえ。なに、これ……」

明らかに怯えた様子で、舞はノートを返す。そのページを見た裕子の顔が恐怖の色で染まった。

ノート二ページ分が、「死ね」の文字で埋め尽くされていた。

今の利き手は……。